

210627八栗シオンキリスト教会礼拝宣教参考資料 ヨハネ1:35-51「弟子から弟子へ」

## 1. ヨハネから二人の弟子たちへ 35-39節

35-37 なぜヨハネは再び弟子たちを伴ってイエスのもとに来たのか？

→弟子たちにイエスの弟子となることを促すため

→ヨハネはイエスが現れた今、自分の役割が終わったことを理解した。もうこれ以上自分のもとに弟子たちを留まらせる必要はなく、メシアのもとに送り出した。

「彼がそう言うのを聞いて、イエスについて行った」

・イエスが「神の子羊」であると師であるヨハネから聞き、二人の弟子たちはイエスに従った。  
→彼らはその言葉の意味をこの時点ではまだわからなかった。しかし、ついていった。信仰の第一歩はイエスについての理解が朧げな中でイエスについていくもの。いや、信仰者となってもなお、同様である。

## 2. アンデレからシモンへ 40-42節

38「あなたがたは何を求めているのですか」

・イエスについていく二人にイエスはこう問われた。  
→イエスについていくとき、だれもがこう問われるのではないか。何を求めてイエス・キリストについてくるのかと。そして、今もついてきているのかと。

38「ラビ（訳すと、先生）、どこにお泊まりですか」

・イエスの質問に対する答えとしては幾分噛み合っていないようにも見える。  
・二人の弟子たちは、自分たちが何を求めているのかもわからなかったのではないか？彼らは師ヨハネに言われるがままにイエスについていった。  
・それでも、イエスからじっくりと話を聞き、この方がどのような人なのかを知りたいとは願っていたのだろう。だから、滞在先を尋ねたのではないか。  
→私たちもイエスがどのようなお方か最初はよくわからないでついていく。イエスに何を求めているのかも最初はよくわからないことがある。それでも、イエスがどんなお方なのかを知りたいという思いはある。

39「第十の時」

・ユダヤ式の時刻の場合、午後4時を指す。  
・ローマ式（私たち）の時刻（夜の12時から昼の12時の方式）の場合、午前10時となる。  
・ローマ式の場合、アンデレがシモンを紹介したのは同じ日となる。しかし、この物語の推移からすれば、宿泊所で一晩過ごし、その翌日、ペテロをイエスのもとに連れてきたと理解する方が自然な流れか。また、直訳は「第10の時」であり、「10時」という表現ではない。したがって、ユダヤ式の時刻を指すと考えられる。

40「シモン・ペテロの兄弟アンデレであった」

・アンデレはバプテスマのヨハネの弟子であった。  
・もう一人の名前は明らかにされていない。「イエスが愛しておられた弟子」（13:23）と推測されることもあるが、確かな根拠はない。

#### 41 「彼はまず自分の兄弟シモンを見つけて」

- ・アンデレはイエスに会った後、このことをまず兄弟シモンに知らせた。
- 伝道は自分自身がイエス・キリストに出会ったことを紹介することから。

#### 41 「会った」

- ・41 「見つけて」とギリシア語では同じ言葉。
- ・「メシアを見つけた」と訳すことも可能。
- ・これまでユダヤ人が探していたメシアに遂に出会ったというニュアンスがあるか？

#### 41 「メシア」

- ・アンデレはまずイエスを「神の子羊」と聞き、そして「メシア」と呼んだ。
- ・神の子羊＝メシア
- ・神のために献げられる犠牲の子羊がメシア（救い主）。軍馬にまたがる王が救い主ではない。

#### 42 「彼はシモンをイエスのもとに連れて来た」

- ・アンデレの重要な働きは、ペテロをイエスのもとに連れてきたこと。
  - ・アンデレ自身は聖書の中でそう多くは登場しない。この後、ペテロが弟子たちの中で中心的な存在となっていく。
- 人にはそれぞれ働きがある。誰かと誰かを引き合わせることも大きな働き。人は出会いで決まる。出会いによって、人生は大きく変わる。イエス・キリストを紹介し、教会につれてくることは、大きな働きである。伝道には様々な段階があり、それぞれの段階に様々な人が関わる働き。

#### 42 「ヨハネの子シモン」

- ・21:25でもイエスはこの呼び名を使っている。
  - ・一方、マタイでは「バルヨナ・シモン」（ヨナの子シモン）という呼び方。
- シモンの親はヨハネとヨナのどちらなのか？
- ・ヘブル語から見ると、ヨナとヨハネは異なるので、両者を同一人物と考えることは難しい。

#### 〈ヨナをシモンの父親〉と考える場合

- ・「ヨハネの子シモン」の「ヨハネ」とはシモンの父親を意味しない。では何を意味するのか？
- ・シモンの兄弟アンデレはバプテスマのヨハネの弟子であった。この時、シモンはアンデレと共にバプテスマのヨハネが洗礼を授けていたベタニアにいたと考えられる。したがって、シモンもヨハネの弟子であったかもしれない。「ヨハネの弟子」という意味で「ヨハネの子シモン」とイエスは呼んだのかもしれない。この文脈ではあり得る解釈である。
- ・しかし、問題もある。21章において、復活のイエスがペテロに「ヨハネの子シモン」と呼びかけた理由がうまく説明できない。イエスとおよそ3年間共に歩んできたペテロに対して、「ヨハネの弟子」という意味で「ヨハネの子シモン」と呼ぶだろうか？
- ・21章における「ヨハネの子シモン」という呼びかけは、イエスを三度知らないと言ってしまったシモンに対して、「岩」を意味する「ペテロ」を使うことを避けたからである。「岩」のような土台が築かれた信仰者からは程遠かった。そこで、彼がまだイエスと出会う前の呼び方で呼んだ。それが「ヨハネの子シモン」である。ヨハネがシモンの父親でないとすれば、シモンがまだ「ヨハネの弟子」であった時を思い出させるために、イエスは「ヨハネの子シモン」と呼びかけたことになる。

〈ヨハネをシモンの父親〉と考える場合

- ・「ヨナの子シモン」の「ヨナ」はシモンの父親を意味しない。では何を意味するのか？
- ・マタイ16章でイエスはこの呼称でシモンを呼んでいるが、そのやり取りの前に、イエスはパリサイ人たちと議論している。彼らがイエスに天からのしるしを求めると、イエスは「ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません」と答えている（マタイ16:4）。
- ・ヨナがシモンの父親でなく、そして、直前のこの文脈を踏まえると、「ヨナの子シモン」という呼び名は、預言者ヨナとシモンを何らかの点において関係づけていることになる。
- ・ヨナとシモンにどのような共通点があるのか？ヨナは神の命令を拒んだ。シモンもイエスを三度知らないと否定する。神を否むという点でヨナもシモンも共通点をもつと考えられる。つまり、「ヨナと同じ過ちを繰り返す者」という意味での「ヨナの子」である。
- ・シモンはイエスをキリストであると告白した直後に、イエスの十字架を否定する。そして、このことでイエスから叱責を受ける。もうすでにシモンが「ヨナの子」であることが現れていると言えるのかもしれない
- ・しかし、こうは説明したものの、こじつけた感が拭えない。というのも、イエスがペテロと話す直前にヨナの話をして、その後、ペテロに「ヨナの子シモン」と呼びかけただけなので、このような解釈はこちら側（読者）の想像力に依存している。

↓

以上、どちらの場合にも不自然さが残る。

シモンの父がヨハネなのかヨナなのかは、はっきりとしない。

#### 42 「ケファ」 「ペテロ」

- ・「ケファ」はアラム語で「岩」を意味する。
  - ・ペテロはギリシア語で「石」を意味する。
  - ・ペテロの将来を預言している。この時のシモンは「岩」からは程遠かった。
  - ・ペテロが信仰告白したときにも、イエスは「あなたはペテロです。わたしはこの岩の上に、わたしの教会を建てます」（マタイ16:18）とシモンが「岩」となることを預言したのであった。
- イエスはシモンが「ペテロ」（岩）として成長した将来を見ていた。

#### 3. ピリポからナタナエルへ 43-51節

##### 43 「その翌日、イエスはガリラヤに行こうとされた」

- ・ということは、イエスはこれまでガリラヤにはおらず、ヨルダンの川向うのベタニアにいたのだろう（29）。
- ・アンデレともうひとりの弟子、さらにシモンもベタニアで出会ったと考えられる。ガリラヤのベツサイダ出身であるアンデレとシモンがなぜベタニアに、バプテスマのヨハネのもとにいたのか？シモンもヨハネの弟子であったからというのは考えられる。

##### 43 「ピリポを見つけて」

- ・イエスはピリポを弟子とするためにガリラヤに来た。

##### 45 「ナタナエル」

- ・共観福音書の12弟子のリストには登場しない。
- ・バルトロマイと同一人物と考えられることもある。

・しかし、彼を12弟子の一人として必ずしも考えなくてもよい。そのように考えなければならぬ必然性はない。

45 「モーセが律法の中に書き」

ルカ 24:27 それからイエスは、モーセやすべての預言者たちから始めて、ご自分について聖書全体に書いてあることを彼らに説き明かされた。

ルカ 24:44 そしてイエスは言われた。「わたしがまだあなたがたと一緒にいたころ、あなたがたに話したことばはこうです。わたしについて、モーセの律法と預言者たちの書と詩篇に書いてあることは、すべて成就しなければなりません。」

46 「ナザレから何か良いものが出るだろうか」

・ナザレは旧約聖書に登場しない。また、ガリラヤからは狂信家やにせキリストしか出ていなかったのだから、このように言われたのかもしれない。

46 「来て、見なさい」

・偏見をもたず、実際に自分の目で見て、判断せよということ。  
→イエス・キリストに対する評価は聞いたところだけで判断されることが多い。現代も変わらない。  
・イエスも39節で似た言葉を使った。

47 「この人には偽りがありません」

詩篇 32:2 幸いなことよ  
主が咎をお認めにならず  
その靈に欺きがない人は。

51 「神の御使いたちが人の子の上を上り下りする」

・イエスは天と地の上に立てられた「梯子」。  
→天（神）と地（被造世界）をつなぐ仲介者。  
→ナタナエルが見る「それよりも大きなこと」とはイエスが天と地をつなぐ神から遣わされた御子であること。